

# 日本語学習者の漢字語彙産出における困難度の分析 —繁体字背景と簡体字背景の比較から—

Differences in the Difficulty of Japanese Kanji Vocabulary Production:  
A Comparison between Learners with Traditional and Simplified Chinese Script Backgrounds

吉 甜

筑波大学・国立国語研究所

李 羽喆

マカオ大学・人文学院日本語学科

## 要旨

中国語を母語とする日本語学習者（Chinese-speaking Japanese learners, 以下 CJL）の漢字語彙産出に関する研究は、言語使用上の誤用に焦点が偏り、学習者の文字背景や言語環境を考慮した分析は十分に行われていない。本研究は、複言語・複文化にあるマカオ地域の CJL を対象に、繁体字・簡体字・双方背景の 3 つのグループに分類し、書き方、読み方、使い方から産出の困難度と困難項目を調査した。その結果、平均困難度は読み方＞使い方＞書き方であり、学習期間の推移では、書き方が初期に大幅低下したのに対し、読み方と使い方はいずれも波状の推移を示した。項目別では、書き方において表記差、読み方において一字多読、使い方において類義語が最も多く選択された。また、背景別の比較から、共通項目がある一方で順位や出現傾向に相違が見られた。以上の結果から、CJL にとって漢字語彙の読み方が最大の難関であり、CJL を一括せず文字背景の違いを考慮した指導の必要性が示唆される。

## キーワード：

日本語教育、中国語母語話者、文字背景の差異、困難度、普通話（標準語）

# 日本語学習者の漢字語彙産出における困難度の分析 —繁体字背景と簡体字背景の比較から—

吉 甜<sup>1</sup>

筑波大学・国立国語研究所

李 羽喆<sup>2</sup>

マカオ大学・人文学院日本語学科

## 1. はじめに

日本語と中国語はいずれも漢字文化圏に属しており、中国語を母語とする日本語学習者（以下 CJL）の漢字語彙学習については、多くの研究が行われてきた。これらの研究では、主に漢字の意味理解や使用面に焦点が当てられ、CJL の学習特性や母語の影響が明らかにされてきた（森山 2015、李 2022、吉 2024 など）。

しかし、既存研究の多くは、CJL を一様な集団として扱っており、繁体字や簡体字という異なる文字体系を背景にもつ学習者間の差異を十分に考慮していない。また、漢字語彙の産出に関する研究も「使い方」に偏り、「書き方」と「読み方」といった産出側面に関わる検討はほとんど扱われていない。

とりわけ香港・マカオ地域では、繁体字の運用を基本としつつ、簡体字圏（中国メインランド）に隣接しており、普通話、英語、広東語、マカオ地域ではさらにポルトガル語も使用されている（原 2015）。このような複言語環境を有する地域の教育現場では、繁体字背景、簡体字背景、および双方の表記体系に馴染んでいる学習者が同一教室で学んでおり、漢字表記および言語背景の異質性が漢字語彙の産出に影響を及ぼす可能性がある。

こうした多様性が特有の教育的課題を生み出していると考えられるにもかかわらず、文字体系の異なる学習者が、日本語の漢字語彙を産出する際には、何にどのような困難を感じているのかについて、いまだ十分に検討されていない。本研究では、こうした研究の空白に着目し、異なる文字体系を背景にもつ、あるいは複数の文字体系に接してきた CJL を対象に、漢字語彙産出の困難度を 3 側面（書き方、読み方、使い方）から検討するとともに、漢字圏学習者内の多様性にも考慮し、文字背景別の相違を明らかにしようとしている。

---

<sup>1</sup> ji.tian.iajs@japan.tsukuba.ac.jp

<sup>2</sup> yuzheli@um.edu.mo

## 2. 先行研究

CJL を対象とする漢字語彙の習得に関する研究は、多様な観点からその困難さを指摘してきた。文脈テストに基づく分析では、森山（2015）が和語動詞の産出に着目し、日本語習熟度が高くなるにつれて、文脈の中で和語動詞を正確に使用できる傾向がある一方、理解の知識に比べ産出の知識が遅れて発達することを指摘している。学習者作文コーパスの研究としては、吉（2024）は「努める」と「努力する」のような意味が類似している和語動詞と漢語サ変動詞について分析し、両者の使い分けに誤用が生じていることを明らかにしている。また、学習者視点に関する研究では、李（2022）は語彙産出の「足りない」「覚えられない」「出てこない」「しっくりこない」という4つのつまずきがあると示している。

CJL を対象とする漢字語彙産出の研究は蓄積されてきたが、次の2つの課題が残されている。1つは、CJL を一括的に扱い、繁体字背景と簡体字背景の差異が十分に検討されていないことである。とくに、香港・マカオ地域は繁体字圏に属しつつ、広東語や英語等が並行して用いられる多言語環境にあり、さらに近年は簡体字背景をもつ学習者も増えてきている（原2015、p216）。こうした地域特性を厳密に考慮した実証研究は不足している。

もう1つは、産出面の習得を体系的に分析する研究がまだ少ないことである。李（2020）は、「産出型語彙学習」の導入を提案し、語彙学習のあるべき姿として、語彙を的確に理解し、適切に産出し、その過程で出てくる新しい語彙を学び続ける動的なプロセスを示した。この研究は、語彙産出のプロセスを明らかにした点で意義深いが、学習者の漢字語彙における困難度そのものを分析の焦点としてはいない。

本研究は、異なる文字体系を背景にもつ、あるいは複数の文字体系に接してきた CJL の漢字語彙産出の困難度を解明することを目的とする。具体的には、複数の漢字文化が交錯する香港・マカオ地域において、歴史的経緯によりポルトガル語も使用されるマカオ地域を対象に、CJL を繁体字・簡体字・双方背景に区分したうえで、書き方、読み方、使い方の3つの側面から、漢字語彙学習の実態と困難度について分析する。なお、本研究で扱う漢字語彙とは、日本語で漢字表記を使用するものを指す。以上を踏まえ、本研究では以下の2つの研究課題（以下：RQ）を設定する。

RQ1 日本語漢字語彙の産出において、CJL は書き方、読み方、使い方の各側面で、どの程度の困難さを感じるか。

RQ2 繁体字・簡体字・双方背景をもつ学習者の間で、難しく感じる項目には、どのようなものがあり、どのような相違が見られるか。

### 3. 研究方法

#### 3.1 調査の手続き

前述の研究課題を明らかにするため、マカオ地域の一大学の協力のもとで調査を実施した。2025 年9 月1 日から9 月30 日にかけて、日本語学習者91 名を対象にアンケート調査を行い、その後、同調査協力者のうち 15 名（繁体字背景 5 名、簡体字背景 7 名、双方背景3 名）を対象にフォローアップ・インタビューを実施した。

アンケート調査では、調査協力者の①言語背景、②日本語学習背景、③漢字語彙の書き方、読み方、使い方という 3 つの産出面の困難度について設問した。困難度について、5 件法（1＝全く難しくない～5＝非常に難しい）で評価し、加えて各側面で具体的に困難を感じる項目を選択式で回答させた。詳細は 3.3 節で述べる。

アンケート調査は、授業内での案内と学内掲示により募集し、オンライン上で配布・回収した。参加は任意であり、サンプルは便宜抽出（convenience sampling）によるものである。そのため、回答者は研究への参加に同意した学習者に限られ、学習者全体を代表するとは限らない。

また、回答時間はおおよそ 15～20 分であった。アンケート末尾でインタビュー参加の可否を確認し、学習期間や母語背景の偏りを避けるよう割当抽出を行った上で、30～45 分の対面またはオンラインインタビューを実施した。倫理的配慮として、調査協力者には研究の目的および内容を事前に説明し、自由意思に基づき同意書に署名を得た。すべてのデータおよび録音内容は逐語化の後に匿名化し、個人が特定されないよう十分に配慮した。

#### 3.2 調査協力者の属性

調査協力者の母語背景については、アンケート項目「あなたの母語、あるいは母語に近い言語」への回答に基づき、繁体字背景（Traditional Chinese, 以下 TC）、簡体字背

景 (Simplified Chinese,以下 SC)、双方背景 (Dual-script Chinese background,以下 DSC) の三群に分類した。91 名のうち、繁体字背景 43 名 (47%)、簡体字背景 28 名 (31%)、双方背景 20 名 (22%) である。ただし、この部分が本調査協力校の募集条件と学生構成を反映したものであり、マカオ地域全体の CJL、あるいは他の地域の CJL を代表するものではない。調査協力者の日本語学習期間は、表 1 のとおりである。

繁体字背景は「広東語」と回答した学習者であり、概ね香港・マカオ地域の出身で、現地の学校教育を広東語で受けている。一方で、学校教育を通じて普通話<sup>3</sup>を学習しており、普通話を用いる理解または会話が一定程度可能である。簡体字背景は、「普通話」と回答した学習者で、中国メインランド出身で高校まで教育を受けた者が中心である。広東省出身で、広東語を理解する者も含まれるが、総じて簡体字背景で育っている。双方背景は、「普通話と広東語両方が母語レベル」と回答した学習者であり、中国メインランドと香港・マカオ地域の双方で教育を受けてきたことや、家庭内で両言語を併用していることが確認された<sup>4</sup>。

**表 1 調査協力者の日本語学習期間の内訳**

| 学習期間      | 人数 | 割合  |
|-----------|----|-----|
| 0～3 ヶ月    | 26 | 29% |
| 3 ヶ月～6 ヶ月 | 10 | 11% |
| 6 ヶ月～1 年  | 20 | 22% |
| 1 年～2 年   | 10 | 11% |
| 2 年～3 年   | 8  | 9%  |
| 3 年以上     | 17 | 18% |

### 3.3 困難度の測定指標

アンケート調査では、漢字語彙の書き方、読み方、使い方という 3 つの産出面の困難度を測定した。各側面の総合的困難度は 5 件法 (1=全く難しくない～5=非常に難しい) で設定し、学習者に自己評価してもらう。

<sup>3</sup> 北京語や標準語ともいう。

<sup>4</sup> 母語申告と学校教育の実施地域が一致しない少数事例 (広東語申告者 1 名は中国メインランド就学、もう 1 名は越境就学、また普通話申告者 2 名は越境就学) があるが、教育言語環境は移動や学年差による交絡を受けやすく基準の統一が困難であるため、本研究では母語申告を優先して分析する。

あわせて、それぞれの側面において学習者が困難を感じ得る具体的項目を提示し、表2に示すとおり、書き方4項目・読み方4項目・使い方5項目（計13項目）から複数選択可で回答させる。さらに、設問リスト外の困難を補足できるよう自由記述欄も設ける。以降の分析では、各設問に付した表2の略称およびコードを用いる。なお、コードのアルファベットは困難の側面を示し、K＝書き方（Writing）、Y＝読み方（Reading）、S＝使い方（Usage）を表す。数字は各側面内の設問番号を示す。

表2 アンケート設問—省略・コード対応表

| アンケート設問                 | 本論文の略称  | コード |
|-------------------------|---------|-----|
| <b>書き方</b>              |         |     |
| 日本語漢字・繁体字・簡体字の表記差が分からない | 表記差     | K1  |
| 同一漢字の異体字で混乱する           | 異体字     | K2  |
| 書き順が分からない               | 書き順     | K3  |
| 形の近い字を混同してしまう           | 近形混同    | K4  |
| <b>読み方</b>              |         |     |
| 読みが全く分からない              | 読法不明    | Y1  |
| 一字に複数の読みがあり混乱する         | 一字多読    | Y2  |
| 一つの読みが複数字に対応し混乱する       | 同音異字    | Y3  |
| アクセントが分からない             | アクセント   | Y4  |
| <b>使い方</b>              |         |     |
| 語の意味が分からず使えない           | 語義      | S1  |
| 類義語の使い分けが難しい            | 類義語     | S2  |
| コロケーションが分からず使えない        | コロケーション | S3  |
| 品詞が分からず使えない             | 品詞      | S4  |
| 中日で同形の語の違いが分からず使えない     | 日中同形語   | S5  |

### 3.4 分析方法

漢字語彙の産出に着目し、書き方、読み方、使い方の3つの産出タイプにおける困難度と具体的項目を調査する。困難度について、91名から得た5件法の自己評価に基づき、まずタイプごとに選択率分布と平均困難度を算出し、産出タイプ別の分布特性を記述する。次に、日本語学習期間別の平均困難度を算出し、困難度の推移を検討する。困難項目について、繁体字・簡体字・双方背景の3群ごとに表2の各項目の選択率を算出し、上位5項目を比較することで群間の異同を分析する。

## 4. 分析結果

### 4.1 漢字語彙の産出タイプごとの困難度

産出タイプ別の度数分布と平均困難度を表3に示す。表3から、いずれの側面でも「困難度3」が最も多く選択されたが、分布の偏りに相違が見られた。「困難度3」より難しいと感じる「困難度4・5」の合計は読み方が最も多く30名(33%)で、次いで使い方21名(23%)、書き方11名(12%)であった。一方、「困難度1・2」の合計は書き方が最も多く36名(40%)で、読み方と使い方はいずれも27名(30%)であった。これらの結果より、読み方は高い困難度に集中し、一方で書き方は低～中程度に集中、使い方は中程度を中心としつつ、一部で高い困難にも分布が広がっていることを示している。

表3 漢字語彙の産出タイプごとの平均困難度

| 産出<br>タイプ | 困難度1<br>n (%) | 困難度2<br>n (%) | 困難度3<br>n (%) | 困難度4<br>n (%) | 困難度5<br>n (%) | 困難度<br>平均値 | 標準<br>偏差 |
|-----------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|------------|----------|
| 書き方       | 3(3%)         | 33(36%)       | 44(48%)       | 9(10%)        | 2(2%)         | 2.71       | 0.77     |
| 読み方       | 5(6%)         | 22(24%)       | 34(37%)       | 20(22%)       | 10(11%)       | 3.09       | 1.06     |
| 使い方       | 2(2%)         | 25(26%)       | 43(47%)       | 16(17%)       | 5(6%)         | 2.97       | 0.87     |

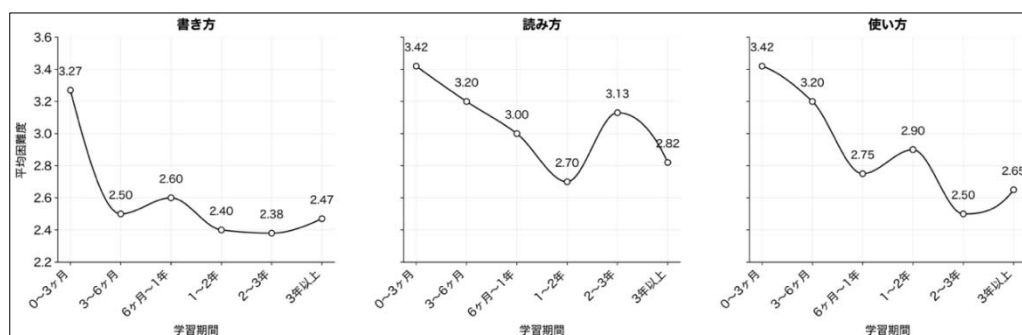
注：5件法（1＝全く難しくない～5＝非常に難しい）

平均困難度と標準偏差を総合すると、読み方は平均困難度が最も高く、かつ分散も最大であることから、学習者全体として困難を感じやすいと同時に、個人差も大きいと言える。一方、書き方は平均困難度が最も低く、使い方はその中間に位置する。標準偏差が比較的小さいことから、書き方と読み方では学習者間の困難度認識が比較的一致していることが示唆される。

### 4.2 学習期間による漢字語彙産出における困難度の変化

産出タイプとそれぞれの学習期間の平均困難度とその変化は図1のとおりである。

図1 学習期間における書き方、読み方、使い方の平均困難度の推移



書き方の平均困難度の変化について、「初期に最も高く、その後低下して安定化する」パターンを示した。0～3 ヶ月に困難度が最も高く、3～6 ヶ月で大きく低下した後は、小幅な変動を挟みつつ緩やかに低下し、全体として安定化した。3 年以上でわずかな上昇が見られるが、初期と比べて明確な改善が維持されている（図1 左）。

学習初期の 0～3 ヶ月から 3～6 ヶ月にかけての大幅な改善は、多くの学習者がこの時期に日本語漢字と簡体字・繁体字の違いに気づき、意識化したことと関係すると考えられる。インタビュー調査では、TC004 は次のように述べている。「学習当初は日本語漢字と混同し、授業の試験で多く減点されたため、復習では漢字を特に注意して見て、どこが異なるのかを丁寧に確認し、誤りを避けるようにしている」。一方、差異への気づき自体を困難とする学習者も存在する。その理由に尋ねると、SC002 は「日本語の漢字には簡体字と同じ字形のものもあれば繁体字と同じ字形のものもあり、いつ簡体字を用い、いつ繁体字を用いるのかの判断が難しい」と述べている。

読み方における平均困難度の変化については、「初期に高く、中期で一度上昇し、再び低下する」という波状パターンを示している（図 1 中）。ただし、全体として相対的に高い水準を持続していることが認められる。

学習中期に読み方の困難度が再び上昇する要因の一つとして、1 つの漢字に複数の読み方があることが挙げられる。学習歴 2～3 年の SC001 へのインタビューでも「日本語の漢字語彙はどこか難しく感じたか」と尋ねた際には、「1 つの漢字の背後に異なる読み方があり、それが本当に厄介だと感じる」と答えた。加えて、学習歴 2～3 年は大学の日本語教育課程では中級から上級へ移行する時期に相当し、この段階では語彙量の増加に加えて、抽象度の高い語彙や専門的語彙、複合語が増える傾向にある。こうした語彙の複雑化および教材レベルの上昇も、読み方に関する困難度の再上昇に影響している可能性が考えられる。

使い方の平均困難度の推移について、学習初期に高かった困難度は、6 ヶ月～1 年で大きく低下する。その後、1～2 年では一時的な上昇が見られるが、2～3 年で再び低下し、3 年以上ではわずかに持ち直す傾向が確認された（図 1 右）。

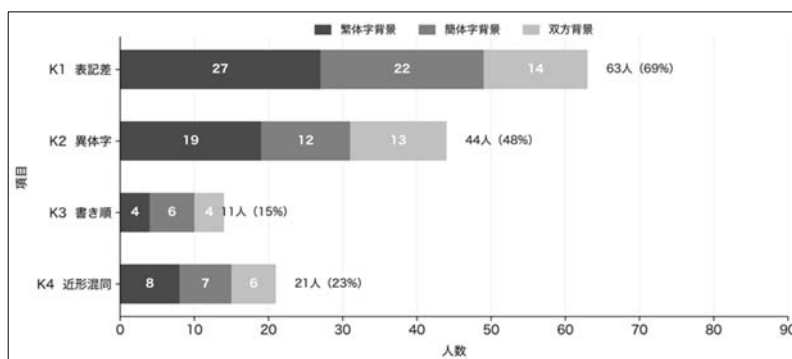
使い方の平均困難度が上昇する局面は、大学の日本語教育の教育課程の進行に照らせば、概ね「初級→中級」および「中級→上級」への移行期に相当すると考えられる。

特に中級、上級に入り、産出場面が増え、どのように使うかについて分からないことが多く出てくると感じられる。学習歴 3 以上で N1 対策中の SC004 は、次のように述べている。「日本語の作文の授業と N1 対策を進める中で、漢字語彙の使い方、特にコロケーションが難しいと実感した」。

### 4.3 漢字語彙産出における困難な項目

各産出タイプにおいて、学習者が具体的にどのような項目に困難を感じているかについて、複数選択式で質問した結果を以下に示す。まず、書き方における困難な項目は、図 2 に示すとおりである。それぞれの項目を上から順番に見ると、表記差 (K1)、異体字 (K2)、近形混同 (K4) といった漢字の字形に関する項目が多く選択されていたことが分かる。

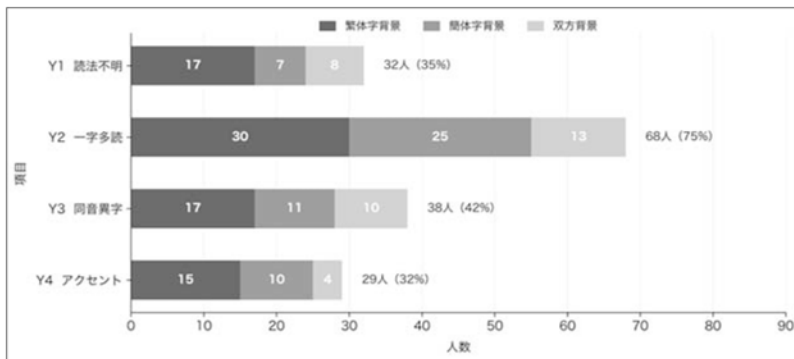
図 2: 書き方に関する困難に感じている項目



とりわけ、表記差 (K1) の内訳を見ると、繁体字背景では 43 名中 27 名 (63%)、簡体字背景では 28 名中 22 名 (79%)、双方背景では 20 名中 14 名 (70%) であり、いずれも各背景の総人数の 60% 以上が選択している。すなわち、漢字圏の背景を有していても、漢字字形の認識に関する困難の項目が多く選ばれたことがうかがえる。

次に、読み方に関する困難項目では、一字多読 (Y2) が最多で、次いで同音異字 (Y3)、読法不明 (Y1)、アクセント (Y4) が続いた (図 3)。

図3 読み方に関する困難に感じている項目



上から順番に見ると、読法不明（Y1）は 32 名（35%）が選択している。インタビューでは DSC001 が「音読みは自分の母語と近い読み方であり、対応関係を見出しやすい一方、訓読みには馴染みが薄く、この種の語は最終的には記憶に頼らざるを得ない」と述べており、読法不明（Y1）の背景として訓読みの習得の難しさが関与している可能性が考えられる。ただし、本調査では音読み・訓読みを区別していないため、今後は両者を分けた測定し、広東語の入声に関する知識が日本語の字音判別に与える影響も含め、各背景の学習者が感じる困難点を検討する必要がある。

また、一字多読（Y2）が 68 名（75%）と最も高く、背景別でも繁体字背景 69%、簡体字背景 89%、双方背景 70%と、いずれも高い割合を示した。とくに、簡体字背景の学習者の 9 割近くが一字多読に困難を感じている。インタビューでは、「一つの漢字には複数の読みがあり、その規則は積み重ねによって身につける必要がある。」(SC001)、「音変が生じるものがあり、難しく感じる」(SC004)といった発言が見られ、漢字と音との対応を固定的に捉える傾向が、同一漢字に複数の読みに直面した際の負担感を強めている可能性が示唆される。一方、繁体字背景の学習者からは「教材に読み方が示されているため、そんなに難しくない」(TC004)という語りもあった。繁体字背景の学習者は多文化地域で教育を受け、双方背景の学習者は普通話と広東語の両方を使用するなど、複数言語に日常的に接しているため、こうした言語経験が一字多読に対する負担を相対的に弱めている可能性がある。

そして、使い方に関する困難項目では、類義語（S2）が最も高く、次いでコロケーション（S3）、日中同形語（S5）、語義（S1）、品詞（S4）の順であった（図4）。

図 4： 使い方に関する困難に感じている項目

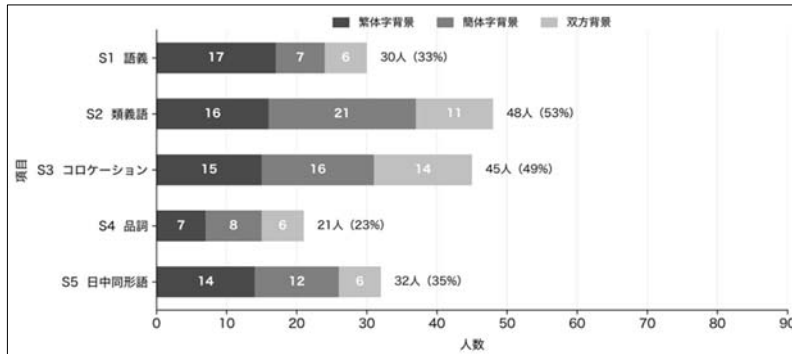


図 4 に示すとおり、語の意味に関わる項目である類義語(S2)、語義(S1)、日中同形語(S5)はいずれも 30 名以上が選択している。インタビュー調査でも、これら 3 つの項目の困難が確認されている。まず、類義語(S2)では SC010 は「語の意味自体は理解していても、どのように使い分けるかが分からない」と述べ、例として「未来」と「将来」を挙げた。SC007 は日本語作文を作成する場面で“更好向著未來前進”に相当する表現を作ろうとしたが、「両語の差が十分に把握できず、どちらを用いるべきか判断できないため、結局その場しのぎで用いてしまうことがある」と報告した。また、語義(S1)に関して、TC005 は「高飛車」を例に「YouTube を見ていてこの語に遭遇したが、意味が全く分からなかった。後に『相手を頭ごなしに威圧するような態度』だと知ったものの、語形からはその意味が直感されず、結びつけにくい」と述べた。ほかにも、複数の調査協力者(TC004、DSC001、SC007)から「遊び名」「山札」「一生懸命」「合宿」など、中国語の漢字知識だけでは意味推測が難しい語が挙げた。さらに、日中同形語(S5)について、SC007 は「日本語と中国語で表記が同一であるため、日本語の意味を取り違えたことがある」と述べ、学習初期に「先輩」を中国語での“革命先烈”に近い意味として誤認していた事例を挙げた。これらにより、使い方の意味面での困難は、日本語固有の語の意味が理解できないこと、中国語知識に基づく推測が間違っていること、類義語の使い分けができないことが挙げられる。

#### 4.4 繁体字・簡体字・双方背景を持つ学習者間の困難項目

漢字語彙産出における困難項目全 13 項目(書き方 4 項目・読み方 4 項目・使い方 5 項目)の中から、繁体字・簡体字・双方背景の三群が選択した上位 5 項目を表 4 にまとめた。

表 4 それぞれの言語背景を持つ学習者の漢字語彙の難しさに関する項目

| 繁体字背景   |     | 簡体字背景      |     | 双方背景       |     |
|---------|-----|------------|-----|------------|-----|
| Y2 一字多読 | 70% | Y2 一字多読    | 89% | K1 表記差     | 70% |
| K1 表記差  | 63% | K1 表記差     | 79% | S3 コロケーション | 70% |
| K2 異体字  | 44% | S2 類義語     | 75% | Y2 一字多読    | 65% |
| S1 語義   | 40% | S3 コロケーション | 57% | K2 異体字     | 65% |
| Y3 同音異字 | 40% | K2 異体字     | 43% | S2 類義語     | 55% |

3 つの背景すべての上位 5 つに共通して出現する項目は、一字多読 (Y2)、表記差 (K1)、異体字 (K2) の 3 項目である。しかし、その順序と割合には顕著な差異が認められる。一字多読 (Y2) は簡体字背景で 89%と最高値を示し、第 1 位であるのに対し、繁体字背景では 70%で第 1 位、双方背景では 65%で第 3 位 (同率) にとどまっている。表記差 (K1) は簡体字背景で 79%と第 2 位、双方背景で 70%と第 1 位 (同率)、繁体字背景では 63%で第 2 位であり、3 つの背景とも上位 2 位以内に位置するものの、その重み付けは背景により異なる。

一方、共通して現れなかった項目もある。類義語 (S2) とコロケーション (S3) は簡体字背景で第 3 位 (75%) と第 4 位 (57%)、双方背景で第 5 位 (55%) と第 1 位 (同率、70%) に位置するが、繁体字背景の上位 5 項目には登場しない。その一方、語義 (S1) と同音異字 (Y3) は繁体字背景のみ上位 5 項目に含まれる (いずれも第 4 位、40%)。また、繁体字背景におけるコロケーション (S3) は第 7 位 (35%) であり、上位 5 項目には含まれないものの、一定の困難度は認められる。

インタビューでは、簡体字背景で「中国語と似ているが完全には同じではなく、母語の影響で誤用しやすい」(SC004)、「教科書の例文が少ないため、使い方がわからない」(SC002) という発話が見られるのに対し、繁体字背景では「英語の固定表現のように記憶すれば良い」(TC002) という発話もあり、コロケーション学習に伴う心理的負担の捉え方の相違がうかがえる。

以上の分析のように、共通項目が存在するが、その順序は異なり、さらに、共通して見られない項目もあるため、繁体字・簡体字・双方背景の学習者が直面している漢字語彙の困難の構造が異なっていることが明らかになった。

## 5. 考察と教育的示唆

### 5.1 漢字語彙の「読み」は最大の難関

本研究から、CJL にとって漢字語彙の読み方が書き方と使い方の 2 側面より高い困難度を示すことが明らかになった。これは、胡（2012）の知見と一致し、本研究の平均困難度に基づいても読み方の高困難度が確認された。劉（2023）も、CJL が同じ漢字に複数の読みがあることは、学習者にとって常に悩みの種であると述べている。さらに、学習期間の推移を見ると、読み方の困難度は初級で高く、中期（2 年～3 年）で一度上昇し、その後やや低下する波状のパターンを示した（4.2 節図 1 中）。これは、中上級レベルで再び読みに関する壁に直面することを意味し、上級者でも読み間違いが解消しきれていない学習者が多いことがうかがえた。

項目別の分析から、同音異字（Y3:一つの読みに複数の漢字が存在している現象）を 42%の学習者、読法不明（Y1:読み方が分からない漢字）を 35%の学習者が困難に感じていたことがうかがえる。とりわけ、一字多読（Y2:一字に複数の読みがある）が顕著であり、全 91 名中 68 名（約 75%）が困難に感じていた。これはすべての困難項目の中でも最も高い割合であり、CJL が日本語の漢字読みで直面する大きな壁であると示している。一字多読の難しさの要因について、母語の影響が挙げられる。母語である中国語では通常、一文字一音で表記されるため、多音字であっても文脈によって判断しやすい。それに対して、日本語のように漢字一字が複数の音（音読み・訓読み）をもつことは母語に日本語と異なる音韻体系をもつ CJL にとって大きな困難となると考えられる。

したがって、本調査対象の CJL においては、一見すると漢字の意味が分かるために読み方を軽視しがちになる傾向があるが、音読み・訓読みの練習や読み方の体系的な指導が不可欠である。特に CJL 学習者にとって難しい一字多読に関しては、音読みか訓読みかを判断する手掛かりを明示した上で、文脈に基づく選択や判別練習を繰り返すことで、読み方の負担を軽減できるのではないかと考えられる。例えば、誤答を「音読み・訓読みの取り違い」「語彙としての記憶不足」「文脈手掛かりの見落とし」のように型分けしてフィードバックし、再選択させることで、判断手順の意識化と定着を促す。さらに、双方背景の学習者では表記差（K1）とコロケーション（S3）が上位に位置するため、字形の選択（表記差）と運用（連語）を同一課題の中で扱い、産出後の自己点検（どの字形を選んだか、どの語の結びつきに迷ったか）を言語化させる活動が適すると考えられる。

## 5.2 繁体字・簡体字・双方背景を持つ学習者間の相違

本研究の調査協力者はすべて広義の漢字圏出身であったが、背景別に困難項目には相違が見られた。とりわけ双方背景群は、他群とは異なる困難プロフィールを示した。双方背景群では表記差 (K1) とコロケーション (S3) が最上位に位置し、困難の焦点が字形の調整と運用上の自然さの二側面に分かれている可能性がある。前者は、双方の文字体系に接してきた経験により日本語漢字との細かな表記差に気づきやすく、産出時の形の選択に負荷が生じるためと考えられる。後者は、語の概略意味を把握していても連語選択が課題として残りやすいことを示す。なお、本研究は横断的調査であるため、以上は結果に基づく仮説である。

そして、全ての背景群で共通して上位に挙げたのは、一字多読 (Y2)、表記差 (K1)、異体字 (K2) の 3 項目であった。すなわち、漢字の読み分けと字形の違いが漢字圏学習者全体に共通する主要な困難であることが裏付けられた。一方、言語背景によって差異が現れた項目もあった。例えば、繁体字背景の学習者では、コロケーション (S3) と類義語 (S2) は上位 5 項目に入らず、語義 (S1) や同音異字 (Y3) が上位に挙げた。簡体字背景の学習者 (主に中国メインランド出身者) は日本語漢字語彙の学習に際して母語の知識に頼ってしまう傾向がある。一方、繁体字背景の学習者 (香港・マカオ地域など) は日本語との接触が文化的に深いため、語彙の意味の違いに早い段階で気づきやすい可能性がある。その結果、前者は語のニュアンスやコロケーション運用で困難を感じる (母語の直訳だけでは対応しにくい部分)、後者は語義理解や音の区別で相対的に困難を感じるといった傾向が示唆される。このような違いは、学習者の出身地域や教育経験に基づく学習ニーズやつまずきの傾向の違いを反映している可能性がある。また、学習者個々の日本語接触状況 (例えば、日本語メディアへの親しみや日本での生活経験) や学習スタイルの違い (受験勉強中心かコミュニケーション重視か) も影響する可能性がある。

重要なのは、漢字圏背景を一括りに捉えるのではなく、出身地域や文字体系の違いで学習上の強みや弱みが異なるという点である。本研究はその一端を示したに過ぎないが、漢字圏学習者の多様性に着目し、とりわけ双方背景群という特徴的な集団の困難プロフィールを含めて、文字背景の違いに伴う困難項目の相違を数量的に明らかにした。本研究は、マカオ地域の一大学に在籍する CJL を対象とした範囲で、学習者の文字背景に応じた支援の必要性を示すエビデンスと位置付けられる。語彙産出面の困難がどのように顕在化するかを検討するためには、言語接触・学習環境・学習目標の違いを含む追跡的な視点の重要性が示唆される。

## 6. おわりに

本研究は、異なる文字体系を背景にもつ、あるいは複数の文字体系に接してきた CJL を対象に、漢字語彙の産出について、書き方、読み方、使い方の 3 つの産出タイプにおける困難度と、学習者が困難と感じ得る具体的項目を調査した。困難度の分析では、読み方の平均困難度が最も高く、使い方は中程度、書き方は相対的に低いことが明らかになった。学習期間に伴う変化として、書き方は早期に大きく低下した後は安定するのに対し、読み方と使い方は波状に推移した。

本研究は、CJL を一様な集団として扱うのではなく、文字背景の違いに着目し、漢字語彙産出の困難を 3 側面から整理した。とりわけ、同じ漢字圏学習者であっても困難項目の現れ方が背景によって異なる可能性を数量的に示したことは、文字背景に応じた指導設計を検討するうえで基礎的資料となる。一方で、本研究はマカオ地域の一大学における便宜抽出の横断的調査であり、結果の一般化には限界がある。

今後は、複数機関・複地域のデータにより再検証するとともに、縦断的研究によって困難の変化過程を捉える必要がある。加えて、読み方の困難については音読み・訓読みの区別を含めた測定を行い、広東語の音韻知識など言語接触の要因との関連も視野に入れて分析することで、背景別の困難の要因を検討することが課題である。

### 謝辞

本研究は、①2025 年度公益社団法人日本語教育学会「日本語教育グローバル人材奨励プログラム」（代表：吉甜）、②科研費 25K16325（代表：吉甜）、③住友財団 2024 年度アジア諸国における日本関連研究助成（代表：李羽喆、24801049）、④国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」（代表：石黒圭）の支援を受けて実施した。査読者の先生方ならびに調査にご協力いただいた協力校の皆様に深く感謝申し上げます。

**日本語学習者の漢字語彙産出における困難度の分析**  
**—繁体字背景と簡体字背景の比較から—**

**参考文献**

- 吉甜(2024)「中国語話者はなぜ不自然な文を産出するのか—作文コーパスにおける和語が漢語に添削された文を中心に—」『語彙研究』21巻, 37-48
- 胡曉睿(2012)「漢字の音読みの習得に及ぼす母語の影響—中国人日本語学習者の場合—」『明海日本語』17号, 93-102
- 森山仁美(2015)「文脈における和語動詞語彙の産出—中国語母語話者のケース—」『日本語教育』161号, 2-14
- 原隆幸(2015)「香港とマカオにおける言語教育—旧宗主国の違いは言語格差をもたらすのか—」『言語と格差—差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』, 明石書店, 211~228
- 李羽喆(2020)『日本語教育における産出的語彙学習を実現する教育的枠組み—中国の大学日本語専攻生の語彙学習の改善を事例に—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 李羽喆(2022)「語彙習得理論から考えた日本語学習者における語彙学習の悩み—4つのつまずきの分析を中心に—」『日本学刊』25号, 80-93
- 劉志偉(2023)「学習過程における「モヤモヤ感」について」『日本語文法』23巻1号, 20-36